

論説 コンストラクティヴィズムと権力／知： アレキサンダー・ウェントを中心に

著者	南山 淳
雑誌名	筑波法政
巻	34
ページ	127-141
発行年	2003-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/00156014

コンストラクティヴィズムと権力／知

——アレキサンダー・ウエントを中心に——

一 はじめに ——現代国際関係論と権力／知——

南山 淳

冷戦構造の崩壊を背景とした「ポスト実証主義論争 (The Post-positivist Debate)」の展開は、現代国際関係論に「科学と権力の関係をどうとらえるか」という問題を改めて問いかけた。もちろん冷戦期においても、ウエーバーを引き合いに出すまでもなく、社会科学における「客観性」の問題ならびに、国際関係論という学問分野が宿命的にもつ、その特殊アメリカ的性質が論じられることがなかったわけではない。しかし「冷戦の科学」としての国際関係論が隆盛を極めるなか、存在論 (ontology) や認識論 (epistemology) を含む国際関係論のメタ・レヴェルで作用する「権力の問題」を論じた研究はほとんど皆無であったといつてよい。

そのような問題が顕在化した理由を単純に冷戦構造の崩壊に対して主流派の国際関係論が説得力ある説明を提示できなかったという点に還元することはできない。国際システム構造のダイナミズムを解明することが、現代国際関

係理論に課された最も重要な課題のひとつであるにもかかわらず、ネオリアリズムやネオリベラル制度主義に代表される実証主義的な国際関係理論は、冷戦構造崩壊の可能性を真剣に理論研究の俎上にのせようとはしなかった。それは実証主義国際関係理論の多くが、国際関係論という「知の体系」の構成をめぐって展開される権力関係に、ほとんど関心を払うことなく、国際関係理論を「客観的」真理を探究するための単なる道具として位置づけてきたからに他ならない。というのも、構造的アナキー、権力政治、安全保障を頂点とした価値序列等、現代国際関係理論の主要概念は、冷戦構造を所与化する存在論／認識論的な圧力として作用しており、それは冷戦イデオロギーに結びつくことが決して少なくなかったからである。冷戦後の今日、いかなる意味においても、客観的に認識された国際政治の「現実」と特定の世界秩序の維持を正当化するイデオロギーを明確に識別する理論的基盤が存在しえないことは、主にポストモダニストによって遂行された実証主義批判のプロジェクトを通じて、明らかにされている。¹³ 現代国際関係理論の客観性はもはや無条件に肯定されるものではないのである。

問題は、にもかかわらずネオリアリズムやネオリベラル制度主義を中心とした実証主義的な国際関係理論が、なぜ「主流派」理論として知的覇権を掌握し続けているのか、あるいは国際関係における「客観的真理」が不可知であるとするれば、国際関係論において、「真理」とされているものは一体何なのかという点である。このような問題意識は、理想と現実、理論と実証あるいは国内政治と国際政治といった、素朴な二元論に立脚してきた国際関係論を、グローバリゼーションが拡大し、境界／アイデンティティが流動化する、冷戦なき世界を理解するための知の体系へと脱構築していくうえで不可欠な視角となる。

本稿の目的は、冷戦後の国際関係理論において、おそらく最も広汎な影響力を及ぼしているコンストラクティヴィズム (social constructivism) ¹⁴ に焦点をあて、そのメタ理論構造に内在する権力関係、ミシエル・フーコーのいう「権

力／知 (pouvoir/savoir ; power/knowledge) の問題を検証することにある。^{7,5)} それは決して権力が知を作りだし、知が権力を利用するという単純な抽象命題ではなく、権力と特定の知の領域が恒常的構成関係にあり、権力を構成しない知、あるいは知を構成しない権力はいかなる意味においても存在しえないという認識論的な立場を指す。⁶⁾

留意すべきは、リアリズムやリベラリズムが常に政治的な価値指向性と政策的インプリケーションを内包しているのに比べて、国際関係理論におけるコンストラクティヴィズムは決して自律的な理論体系とはいえないという点である。⁷⁾ それは冷戦崩壊という世界秩序の変動を受けて提起された方法的視座のひとつにすぎず、したがって、コンストラクティヴィズムと権力／知の問題は、たとえば冷戦期のネオリアリズムのように、決して見えやすいものとはいえない。しかしながら、むしろそれゆえに、権力関係を実体化あるいは与件化することなく、その理論的な戦略性を浮き彫りにし易くするという側面をもっているのも事実である。後述するように、アレキサンダー・ウエントに代表されるコンストラクティヴィストが、科学的認識論の重要性を主張する背景には、⁸⁾ 客観的な「知」を主張することで、潜在化している権力関係の存在を隠蔽するという典型的な権力／知の力学を見てとることができる。

二 現代国際関係理論と「主体—構造」問題

国際政治における「主体—構造問題 (agent-structure problem)」をどのようにとらえるかという問題は、コンストラクティヴィズムが提起した最大の理論的争点である。⁹⁾ ケネス・ウォルツが、アナキーな国際政治における権力構造をもつばら物理的なパワー配分の観点から説明したことはよく知られているが、¹⁰⁾ このような方法的な立場を選択した結果、概念操作の利便性が向上する一方で、国家を中心とする行為主体の行動態様が軍事バランスや経済力等の

物質構造によって規定される傾向が強化され、結局それは「アナーキー構造決定論」へと結びつくことになる。

これに対しコンストラクティヴィストは、国際関係における「構造の二重性 (quality of structure)」を強調する¹¹⁾。構造が主体の決定に関して最も基本的な条件を付与していることは確かである。しかし構造を「時空を越えて再生産される社会システムの集合体に関するルールおよび資源」ととらえた場合、構造は主体行動の媒介項になると同時に、主体の行為は構造を再生産するための媒介項と見なすことが可能になる¹²⁾。つまり構造が主体に行動選択の枠組みを提供し、主体の行為が構造を再生産する誘因となるのである。構造が主体を構成し、主体が構造を再構成する。このような相互行為を通じて構造—主体間の境界線は消失し、両者の関係は一元化する。したがって、国際構造は客観的な物質構造にのみ還元できるものではなく、主体が構造をどのように認識するかという規範構造と一体のものとして理解されなければならないことになる。

国際主体は自らがおかれている物質構造をそれぞれの視角を通じて解釈しながら、その行動を決定する。その場合、物質構造の解釈はしばしば歴史的に生成された特定のアイデンティティに基づいて構成される¹³⁾。そしてこの規範構造を理解する際に中心的な概念となるのが「間主観的理解 (intersubjective understandings)」と「文化 (culture)」という概念である。ウエントによれば、間主観的理解とは主体の相互認識 (相手の合理性、戦略、選好、信条等)、および外部世界 (external world) の状況に関して共有されている知識 (common knowledge) を意味する¹⁴⁾。そこでは当該の知識が真実であるかどうかということよりも、知識そのものが真実であるということが社会の中で認知されていることが重要になる。同時に、それは社会の構成員個々人の意思に還元可能な「集団的知識 (collective knowledge)」とは異なり、特定社会における意思決定過程を因果的に説明できる「共有化されたメンタル・モデル (shared mental models)」として機能するものでなければならぬとされる¹⁵⁾。たとえば、世界政府が存在しないという意味で、国際構造

がアナキーであることは事実である。しかし実際に国際的なアナキー構造が主体の行動をどのようにに制約するかについては、主体が構造に対して自らの関係性をどのようにに認識するかという点に依存する。その認識枠組み自体、主体がおかれている歴史過程のなかで常に変動の可能性にさらされており、したがって、外生的な物質構造のみを偏重するアナキー構造の理解はあまりに狭く、批判の対象となるのである。¹⁶

そして間主観的理解を構成する基本的な枠組みとなるのが「文化」である。文化とは個々の社会が共通の歴史経験を通じて形成した価値序列の審級過程を意味しており、主体は常にこの「解釈の格子」を通じて外部構造を認識する。個人が何に価値を見いだすかは基本的に彼／彼女が何にアイデンティティを求めるといふことに依存し、文化は個人のアイデンティティを集団的なアイデンティティとして読み替えるための媒介項として機能するのである。ゆえにコンストラクティヴィストは国際関係における規範構造の重要性を主張するのである。

三 コンストラクティヴィズムの論理構造 — 間主観性と科学的实在論 —

一般に国際関係理論におけるコンストラクティヴィズムは、実証主義とポスト実証主義の中間的な立場に位置づけられることが少なくない。しかし、結論を先取りすれば、コンストラクティヴィズムを強調する理論の多くは、実証主義に内在する「権力の戦略」をより巧妙に強化／隠蔽する機能を果たしている。問題となるのは、客観的な社会認識に付随する「二つの問題」、すなわち人間の主観性に起因して生じる社会行為の価値付与性がもたらす行動結果の不確定性（存在論）および観察者の主観的意味理解がもたらす認識の歪み（認識論）である。

価値判断をとまなう社会行為によつてもたらされる行動結果の不確定性に対して、コンストラクティヴィストが、

「社会的事実の間主観的構成」と「構造の二重性」概念を導入することで、これに対処しようとするものについては既に述べた。ここでは、主体の行動は、実証主義者がいうように、外在的な与件として決定されるものではなく、あくまで主体の側が自らの選好を間主観的に理解した結果である。換言すれば、実証主義者が物質構造と規範構造を分離し、前者に後者を従属させる唯物論的立場に立つのに対し、コンストラクティヴィストは、その逆の構図、すなわち「あらゆる社会的事実は間主観的に構成される」という理念主義を徹底させることで、そこに主体の属性を読み込もうとするのである。

このように間主観的存在論を採用することで、コンストラクティヴィズムは、理論そのものの演繹性や厳密性、および（概念の操作性を相対的に曖昧にするという欠点を伴いながらも）主体の行為に付随する不確定性を理論的な被説明要因として処理することを可能にしたのである。それはネオリアリズムの法則定立的な客観性の探求、ならびに主体の属性や歴史状況によって変動する解釈学的な主観性の「構成的再配置」を意味しており、この点でコンストラクティヴィズムは、伝統的なアリリズムやリベラリズムと、その存在論を共有するのである。

他方、観察者の認識枠組みの歪みという認識論上の問題に対するコンストラクティヴィストの立場は、実証主義国際関係理論におけるそれと基本的に変わらない。たとえば、ウエントは国際関係における物質構造と規範構造の相関性を理論構築の前提条件として認めようとして、「科学的事実論 (scientific realism)」を、自らの認識論として導入する¹⁷。科学的事実論とは、世界は個々の観察者の精神および言語から独立して実在しているということとを与件として、十全に証拠立てられた科学的理論であれば、たとえ直接観察が不可能な対象に関するものであったとしても、そのような世界に言及することが可能であるとする合理主義的認識論である。¹⁸

社会的事実が間主観的に構成されるとすれば、それは観察不可能な事象であることを意味している。しかし科学的

実在論を採用することで、不確定な間主観性の世界を合理的に説明することが可能になるとウエントは主張するのである。存在論上徹底した唯物論に依拠するネオリアリズムに対し、コンストラクティヴィズムが基本的に唯名論を支持する立場にあることは既述したが、その認識論については、観察可能な事象にのみ依拠する帰納的経験主義を批判し、科学的実在論を擁護するという点で、両者はその立場を共有する。換言すれば、両者はともに科学的実在論という認識論を通じて、観察不可能な国際システムの全体像を合理化しようとしているのである。したがって、コンストラクティヴィズムが実証主義／合理主義の系譜に属することは明らかであり、それは決して実証主義とポスト実証主義を架橋するものではなく、単に人文主義的（主観性）指向を持つ伝統的国際関係理論と自然科学的指向（客観主義）を持つ科学的国際関係理論の中間に位置づけられるという程度のものにすぎない。

四 実証主義理論としてのコンストラクティヴィズム

確かに、実証主義とポスト実証主義の分岐を、主体―構造問題における客観主義的唯物論と間主観主義的唯名論の差異に求めることは、ネオリアリズムのような極端な構造主義理論に対しては、一定の意味をもち得る。しかし、実際にそのような理論的態度を堅持する研究者は決して多数派とはいえない。むしろ実証主義理論とポスト実証主義理論の違いは、認識論的な主観性の問題をどのように理解するかという点に求められるべき問題なのである。たとえばネオリベラル制度主義の主唱者ロバート・コヘインが「社会的知識が常に価値付与的なものであり、客観性とは、達成されるものというより、ひとつの願望にすぎないということを、私は承知している」と明快に述べていることからも、多くの実証主義者が、人間の主観性が科学的認識に及ぼす影響を承知していることは明白である。にもかかわらず

ず、彼らの多くは、この問題を研究者のモラルの問題として処理し、認識論上の主観性を科学認識の客観性を達成するための手段としてブラック・ボックス化してしまふ。

これに対して、いわゆるポスト実証主義の諸理論に共通している点は、何らかの方法で認識論上の主観性の問題を一元化しようと試みるという点である。たとえば、批判理論は弁証法的真理の探求によって、ポスト構造主義は権力と知の相関性というテーゼによって、フェミニズムはそれを「ジェンダー・バイアス」と見なすことによって、認識論上の権力を問題化しようとするのである。

コンストラクティヴィズムは間主観主義に立脚することで、存在論上の二項対立図式の克服に成功したにもかかわらず、認識論における科学的实在論の採用によって、しばしばネオリアリズムやネオリベラル制度主義といった実証主義国際関係理論を強化する方向に働くことになる。なぜなら、科学的实在論における観察不可能事象に関する理論構築は、研究者が措定する主体の「合理性」に依存するからである。具体的にはこういうことである。まず研究者は国際現象の観察を通じて、そこからある種のパターンを抽出する。もちろん、観察の蓄積のみによって、国際システムの全体像を把握することは不可能であり、彼／彼女は観察不可能な全体像を論理的に推測するために、合理的推論を遂行する。そのため多くのコンストラクティヴィストは、主体構成の問題を、権力の問題としてではなく、科学的合理性に依拠する選択の問題へと還元してしまうことになるのである。

五 「モノ」としての規範／アイデンティティ

コンストラクティヴィストが主体—構造問題の構成的性質を度々主張していることはくり返し述べてきたが、元来

「主体」も「構造」も実体概念ではなく、あくまで主観的な視角から措定された理論言語にすぎない。したがって、研究者が国際関係の分析視角として「主体」や「構造」といった概念を措定する場合、念頭におかれるのは、まずもって主権国家であり、構造的アナキーであることは否定できない。国際主体として最も合理的な主体は何かという問題は、一方で統治原理としての国家主権の歴史的構築過程にまで分析射程を拡充しながら、結果として、分析上最も重要な主体として主権国家を選択する頻度は極めて高くなる。国家主権という統治原理が、歴史的にも理論的にも、圧倒的な影響力を及ぼし続けてきたことを考えれば、主権国家が最も重要な主体となることは明らかだからである。

コンストラクティヴィズムは、存在論に関しては、あらゆる物質構造は規範構造を通じてのみ、理解されうるという間主観主義を導入し、国際関係における「文化」、「規範」、「アイデンティティ」の重要性の再発見をうながした。

特にウエントの議論は、間主観主義の巧妙な再配置によって、ウォルツ流の構造決定論がもつ物質構造偏重の理論的客観主義の回避に成功している。しかし、その認識論については、科学的事実論の採用によって、経験的に検証され、合理的に推論された命題は必然的に客観的真理を意味するという認識論上の与件が構造化されることになる。

そこでは、ポスト実証主義論争において明らかになった、認識論上の権力の問題は捨象される。なぜなら、それはコンストラクティヴィズムが観察不可能な理念を表象する諸概念に対して、操作可能で客観的な定義を与えることによって、合理的推論に依拠した経験的検証手続きの承認を認識論上の絶対条件とするからである。したがって、科学的事実論に關して、実証主義国際関係理論におけるそれと同様の疑問が投げかけられることになる。つまり、「合理的推論を合理的たらしめている認識論上の根拠は何か」という疑問である。そして（ウエントにしたがうかぎり）手続的な合理性以外にこれを保証する基盤は存在しないということになる。

問題となるのは、規範やアイデンティティといった理念を理論的に、あるいは「モノ」のようにつかおうことの意味

味である。²¹⁾ 規範一般あるいは、アイデンティティ一般等というものは存在しない。現実中存在しているのは、固有の歴史構造を有する、具体的なイデオロギー、宗教、エスニシティ等、個人を社会集団として集約する諸価値の体系と、それに依拠する社会行動である。一定の制度的裏付けを共有する主権国家や政府機構とは違い、これらは経験的な観察行為からの合理的に推論によつてのみ概念化される、いわば実体を伴わない「思考の産物」あるいは「想像の共同体」であり、その構築過程は唯名論的にしか理解されえないのである。したがって、規範あるいはアイデンティティの有意義性に最終的な審判を下すのは、研究者の（主観的な）合理性であり、それは権力／知の主要な稼働領域に他ならない。

六 おわりに — 権力／知としてのコンストラクティヴィズム —

国際関係論へのコンストラクティヴィズムの導入は、冷戦の終焉という国際政治の構造変動によつて、「アイデンティティ・クライシス」に直面していた現代国際関係理論に、構造変動の力学に対応可能な理論射程をもたらした。それはいわゆる「ネオリアリズム・ネオリベラリズム総合」と同様、国際関係理論における実証主義の生き残り戦略ととらえることができる。²²⁾ そのような観点に立てば、たとえばネオリアリズムとコンストラクティヴィズムの間で展開された、主体—構造関係に関する論争も限定的な意味しかもちえないことは明らかである。ただしネオリアリストから、コンストラクティヴィズムに対して本質的な疑問が呈されていることを、最後に指摘しておきたい。なぜなら、それがコンストラクティヴィズムを権力／知の問題として理解するうえで重要な意味を持つからである。

「攻撃的ネオリアリスト」として知られる、ジョン・ミアシャイマーはネオリアリズムの立場から、リベラル制度

主義、集団安全保障論、批判理論、コンストラクティヴィズムに対する全面的な批判を展開した。²³それは制度および規範に肯定的な評価を与える国際関係理論全般を「制度主義の諸理論」として一括りにして批判するという独断的で複雑な議論であったが、少なくともコンストラクティヴィズムに関するかぎり、その疑問の一部は正鵠を射たものであった。それは「特定の言説が支配的なものとなり、特定の言説が、その影響力を喪失していくのはなぜか」という根源的な疑問である。²⁶

その理由は明らかである。既述したように、ウェントンの議論においては、科学的实在論を導入し、認識論上の客観主義が構造化されているにもかかわらず、社会現象および社会規範の間主観的構成性が存在論上の所与となっているため、間主観性自体は、客観的な因果関係の被説明要因にはなりえない。その結果、社会現象に関する認識および規範の間主観的な構成過程そのものが理論的与件として外部化されることになる。ゆえに宗教紛争やエスニック紛争等、観点の差異が複数の合理的言説をもたらし、対立関係を呈している事例を合理的に説明することはできないことになる。少なくともミアシャイマーの疑問に対して客観的な解答を与えることは論理的に不可能となる。

以上の点を考慮すれば、ネオリアリストとコンストラクティヴィストの対立は、物質構造偏重の構造決定論を存在論的間主観主義を通じて修正するプロセスとしてとらえるべきものであり、それは単に「論争」という対立関係を演じることで理論間の差異を過度に強調する、権力／知のダイナミズムを表象しているにすぎない。冷戦後の国際関係理論が、ネオリアリズム・ネオリベラリズム総合という実証主義的な「真理の体制」を再構築しつつあるなかで、コンストラクティヴィズムは、合理主義という一見非イデオロギー的な視角から、これを正当化する特殊な触媒として機能しているのである。

ウェントンに代表される主流派の合理主義的コンストラクティヴィストの関心は、主体―構造間の構成関係、国際規

範の制度化、国家行動に対する文化の影響といった問題に集中し、主権国家を中心とする国際主体間の間主観的関係性の説明に終始する傾向にあり、そこには批判的視座が著しく欠如している。それは観察対象(客体)としての国際政治を、規範構造の観点から問題化することに部分的に成功しながらも、自らの認識論上の合理性を構成する過程に権力関係が及ぼす影響、すなわち権力／知に対する理論的な関心が欠如しているからに他ならない。

- (1) 現代国際関係理論におけるポスト実証主義に関しては、Steve Smith, Ken Booth and Marysia Zalewski, *International Theory: positivism and beyond*. Cambridge: Cambridge University Press, 1996. を参照。
- (2) 上の点を検討したものは、Robert Crawford and Darryl Jarvis, eds., *International Relations-Still an American Social Science?: Toward Diversity in International Thought*, Albany: State University of New York Press, 2001. を参照。
- (3) たなかは *International Studies Quarterly*, Special Issue: *Speaking the language of Exile, Dissidence in International Studies*, vol. 34, no. 3, 1990. を参照。
- (4) 本稿で使用する「コンストラクティヴィズム」という言葉は、合理主義に依拠する狭義のコンストラクティヴィズムを意味するものとし、いわゆる批判主義的な国際関係理論はこれに含まれないものとする。この点に関しては、Ted Hopf, "The Promise of Constructivism in International Relations Theory," *International Security*, vol. 23, no. 1, 1998, pp. 171-200. を参照。狭義のコンストラクティヴィズムとして、たなかは以下を参照。Peter J. Katzenstein, ed., *The Culture of National Security: Norms and Identity in World Politics*, New York: Columbia University Press, 1996; John Gerald Ruggie, *Constructing the World Polity: Essays on International Institutionalization*, London: Routledge, 1998; *op. cit.*, Wendt. コンストラクティヴィズムを認識論および広義の方法論の観点から論じたものは、Karin M. and Knud Erik Jørgensen, *Constructing International Relations: the Next Generation*, New York: M.E. Sharp, 2001. を参照。

- (5) フーコーの権力論については以下を参照。Michel Foucault, *Power/Knowledge*. New York: Pantheon Books, 1972; *Discipline and Punish: The Birth of The Prison*, trans. by Alan Sheridan, New York: Vintage Books, 1977; *The History of Sexuality*, vol. I: *An Introduction*, New York: Vintage Books, 1990; Kimberly Hutchings, "Foucault and International Relations Theory," in *The Impact of Michel Foucault on the Social Sciences and Humanities*, ed. by Moya Lloyd and Andrew Thacker, London: Macmillan, 1997, pp.102-127.
- (6) 権力／知の視点から、現代国際関係理論の全体像の検証を試みたものとして、拙稿「国際関係理論の認識論的転回―実証主義批判と権力／知―(一)(二)(三)―」(『筑波法政』第三〇(三)一〇号)二〇〇一年三、九月、一七〇―五五頁、五一―九〇頁を参照。
- (7) コンストラクティヴィズムは、リアリズムやリベラリズムのように一貫した思想的・理論的立場の総称ではない。それは「社会秩序は構造―主体(agent)間の間主観的構成関係によって成立する」という認識論に結びついた方法的な立場の呼称である。しかし実際に何を「構造」と見なし、何を「主体」と見なすか、あるいは物質構造と規範構造をどのよう位置づけるかは、論者によって異なる。したがって、一般にコンストラクティヴィストに分類される研究者であっても、リアリスト、リベラリスト、ポスト実証主義者が混在しており、国際関係論におけるコンストラクティヴィズムという呼称を一義的に定義することは困難である。Nicholas Onuf, "Constructivism: A User's Manual," in *International Relations in a Constructed World*, ed. by Vendulka Kubalková, Nicholas Onuf, Paul Kowert, Arnonk: M. E. Sharpe, 1998, pp.58-78; Maja Zetlous, *Constructivism in International Relations: The Politics of Reality*, Cambridge: Cambridge University Press, 2002, pp.2-10.
- (8) コンストラクティヴィズムにおけるウエントの影響は、ネオリアリズムにおけるウォルツのそれに匹敵するものではない。Alexander Wendt, *Social Theory of International Theory*, Cambridge: Cambridge University Press, 1999. ウエントの評論については、Forum on Alexander Wendt, *Review of International Studies*, vol.26, no.1, 2000, pp.125-180; Friedrich Kratochwil, "Constructing a New Orthodoxy? Wendt's 'Social Theory of International Politics' and the Constructivist Challenge," *Millennium*:

Journal of International Studies, vol.29, no.1, pp.73-10, 和参照。

- (6) 「主体—構造問題」問題として云々を参照。David Dessler, "What's at stake in the Agent-Structure Debate?," *International Organization*, vol.43, no.3, 1989, pp.441-473; Alexander Wendt, "The Agent-Structure Problem in International Relations Theory," *International Organization*, vol.41, no.3, 1987, pp.355-361; "Anarchy is What States Make of It," *International Organization*, vol.46, no.2, 1992, pp.391-423; Harry D. Gould, "What's at stake in the Agent-Structure Debate?," *op. cit.*, Kubáiková, et. al., pp.79-98.
- (10) Kenneth N. Waltz, *Theory of International Politics*, New York: McGraw-Hill, 1979, pp.79-128.
- (11) John Gerald Ruggie, "What Makes the World Hang Together?: Neo-utilitarianism and the Social Constructivist Challenge," *International Organization*, vol.52, no.4, 1998, p.875.
- (12) Anthony Giddens, *Social Theory and Modern Sociology*, Cambridge: Polity Press, 1987, pp.220-221. 「雑誌S11重刊」巻49S 巻50の10-14頁を参照。Anthony Giddens, *The Constitution of Society*, Cambridge: Polity Press, 1984, pp.25-28; 297-304.
- (13) Emanuel Adler and Michael Barnett, "Security Communities in Theoretical Perspective," in *Security Communities*, Cambridge: Cambridge University Press, 1998, pp.12-13.
- (14) *op. cit.*, Wendt, 1999, pp.157-165.
- (15) *Ibid.*, pp.159-161.
- (16) Kenneth N. Waltz, "Reflections on *Theory of International Politics*," in *Neorealism and Its Critics*, ed. by Robert O. Keohane, New York: Columbia University Press, 1986, pp.322-345.
- (17) *op. cit.*, Wendt, 1999, pp.47-91.
- (18) *Ibid.*, p.51.
- (19) Steve Smith, "Wendt's World", *Review of International Studies*, vol.26, no.1, 2000, pp.151-163.

- (20) Robert O. Keohane, "International Relations Theory: Contributions of A Feminist Standpoint," in *Gender and International Relations*, ed. by Rebecca Grant and Kathleen Newland, Buckingham: Open University Press, 1991, p.46.
- (21) この点に関しては Bill McSweeney, "Identity and Security: Buzan and the Copenhagen School," *Review of International Studies*, vol.22, no.1, 1996, pp.81-93; "Durkheim and the Copenhagen School: A Response to Buzan and Wæver," *Review of International Studies*, vol.24, no.1, 1998, pp.137-140.を参照。
- (22) この点に関しては、拙稿「前掲論文(二)六七〜七九頁を参照。ネオリアリズム・ネオリベラル制度主義とコンストラクティヴィズムの補完関係については Joseph S. Nye, *Understanding International Conflicts*, 4th, edition, New York: Longman, 2002, p.8; 石田淳「コンストラクティヴィズムの存在論とその分析射程」(『国際政治』第一二四号、二〇〇〇年)一一〜二六頁を参照。
- (23) John Mearshmeier, "The False Promise of International Institutions," *International Security*, vol.19, no.3, 1994/95, pp.5-49.
- (24) *Ibid.*, pp.14-47.
- (25) *Ibid.*, p.42.
- (26) ウェントは、シアシャイマーの議論の粗雑さを批判し、コンストラクティヴィズムの有効性を主張するのであるが、この疑問に対する明確な解答を避けている。Alexander Wendt, "Constructing International Politics," *International Security*, vol.20, no.1, 1995, pp.71-81.